

神奈川県立近代美術館 葉山館の5年間を振り返って — 展覧会業務の外で

糸山 昌夫 (もみやま まさお)

神奈川県立近代美術館企画課主任学芸員

地球 ミュージアム 紀行

神奈川県立近代美術館／日本

二〇〇三年に矢萩喜徳郎がデザインした神奈川県立近代美術館(以下、「近美」と記す)の口コは三つの四角形からできている。複数の意味が込められているが、まずは近美の三つの建物を示している。もともと古い建物は、一九五一年に建てられた坂倉準三設計の鎌倉館。日本の近代美術館の先駆けであるこの建物は、一九九九年に国際組織 DOCOMOMO によって日本の優れた近代建築二〇選のひとつに選ばれている。次は、鎌倉館から建長寺に向かう上り坂の途中にある鎌倉別館。大高正人建築設計事務所設計で一九八四年に建てられた。そして、もっとも新しい建物が二〇〇三年三月竣工、一〇月に開館した葉山館であり、美術図書室と講堂という新しい機能が近美に加えられた。

現在、近美には「学芸課」はない。二〇〇三年の葉山館整備とともに、それまでの学芸課が企画課と普及課にわかれた。展覧会の企画・実施に関して、各課に所属する学芸員の職務に差はない。ただそれに加えて、企画課は主として所蔵品の管理をおこなない、普及課は主として普及・広報活動をおこなっている。葉山館整備を機に保存・修復の専門家が採用され、近美の作品収蔵環境は、見違えるように変わった。年に何度が、学芸員がそろって収蔵庫や野外彫刻の清掃をする様子は、かつては「梁山泊」と言われた「鎌近」のイメージとはかけ離れているかもしれない。企画課には作品や写真の登録や貸し出し手続きを担当する非常勤職員もいて、そのお陰で学芸員は展覧会業務に集中できると言える。そして、葉山館整備のなかで構築された収蔵品管理システムをベースに、これら非常勤職員や、やはり葉山開館後に制度化したインターンの力も借りて、一五年ぶりに、その間の新収蔵作品四五九一点を収めた収蔵品目録を刊行することができた。

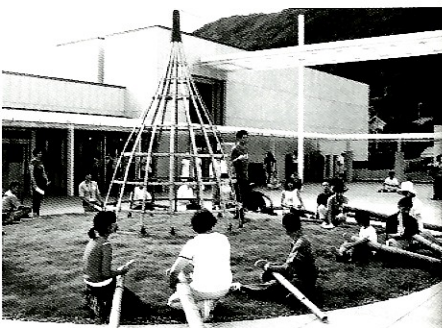
普及課の創設そのものが、今日の美術館・博物館に對

発見することができる、文字通りの「宝箱」になつてい
る。葉山館整備とともにホームページも拡充して、電子
媒体による広報活動の比重もますます増えてきたが、一
方で、二〇数年ぶりに復刊された美術館たより「たいせ
つな風景」も、毎月「風や雲」といったテーマを立てた
エッセイ集として、また別のコミュニケーションのあり
方を探り続けている。

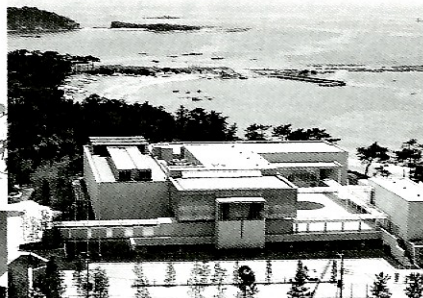
近美は今も、鎌倉館、鎌倉別館、葉山館の三館合わせて
年間一四企画前後と、以前にも増して積極的な展覧会活
動を展開している。しかし、葉山館開館後の五年間に起

きた変化は、これまで述べたように展覧会事業の外でこ
そ顕著であるように思われる。そして、今回開催する、
ASEMUS 国際共同巡回展「アジアとヨーロッパの肖像」
も、展覧会事業を外に開くという、こうした志向の、もう
ひとつの可能性を探るものにはかならない。もともと
このような印象は立場や経験によって大きく左右され
るから、これは私的な感想とお断りさせていただく。

(特別展「アジアとヨーロッパの肖像」は、二〇〇九年二
月七日から三月二九日まで、神奈川県立近代美術館・葉
山館で開催)



ワークショップ
「きょうの はやまに みみをすます」



葉山一色海岸に臨む葉山館

「Museum Box宝箱」



The Museum of
Modern Art,
Kamakura &
Hayama

神奈川県立近代美術館

神奈川県立近代美術館の口コ